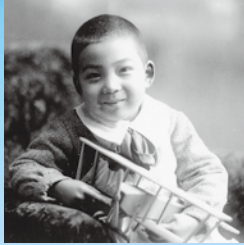


二宮康明先生の紙飛行機連載が

今月で最終回。

1967年の連載スタートから、なんと49年も続いてきた紙飛行機付録の連載が、今月で最終回を迎えます。いつもKOKAについている紙飛行機が、みんなのお父さんやおじいちゃん世代から楽しまれてきたなんて知らなかったという人も多いのでは？ここであらためて、二宮先生の高性能紙飛行機のすごさを、みんなに語り継いでいきたいと思えます。



49年間、子供たちの 育て続けてきた。

二宮先生より
KoKa読者へ
メッセージ!!

小さいころから、
『子供の科学』に載った
飛行機の最新技術の
記事を夢中で読んでいました。
私はただ、大好きなものを
続けてきただけです。
そんな私の紙飛行機を
楽しんでくれた読者、
協力してくれた
みなさまに
心から感謝します。



連載1回目!

1967年9月号から連載がスタート。第1回の機体は、初心者の練習機「トレーナー」でした。

「なんで飛ばないの？」 から始まる探究心

49年前、今と同じ型紙を切り抜いてつくる紙飛行機付録が、初めてKoKaに掲載されました。そのきっかけは、二宮先生設計の紙飛行機が、サンフランシスコで開催された第1回国際紙飛行機大会でグランプリを獲得したこと。日本人が世界でナンバー1になったことを知った当時の編集部が、先生に連載してほしいと依頼したのです。

今も昔も、鳥のように自由に空を飛ぶことは子

供たちの大きな夢。二宮先生の紙飛行機は、ゴムカタパルトを使って空高く打ち上げると、上空を優雅に回りながら、うまくいくと数十秒から1分以上も滑空します。この気持ちよさ、喜び、感動……一度やったことがある人なら、よくわかんと思います。

ところが、がんばってつくった紙飛行機が、うまく飛ばずにすぐ墜落してしまうことも多いのです。二宮先生の紙飛行機は、機体のバランス、翼の角度などを精密に計算して設計されています。だから、つくり方が雑だったり、形が崩れたりし

科学する心を

二宮先生の紙飛行機の中でも、滑空性能を追求し、最もよく飛ぶのが競技用機だ。

次はどんな
機種か
毎号ワクワク!

実在する機体を紙飛行機にしたプロフィールモデル。これは有名な三菱零戦。

「これが飛ぶの?」という変形機は、二宮先生の設計のスゴさを物語る。

40周年のときに掲載された複葉飛行艇。二宮先生オリジナルデザインの自由型機。



折り紙の幾何学とアルゴリズムの研究(コンピューショナル・オリガミ)などで、世界的に活躍する館さん。2016年2月号「進化する折り紙」で登場していただいた。

二宮先生の紙飛行機 で大人になった。

東京大学大学院総合文化研究科助教 館 知宏さん

二宮康明先生の紙飛行機の中でも、ときどき掲載される「変わり種」が特に好きでした。無尾翼機、非対称の飛行機、翼だけの飛行機など、とうてい飛ぶように見えないのですが、きちんとつくって調整するとスーッときれいに滑空するのです。これは小学生だった私には大変な驚きで、興奮しました。

それで、掲載されていた無尾翼機を参考に、滑空する翼竜を紙でつくったり、正方形の紙を折って同じバランスの

紙飛行機をつくれないうか考えたりしたのを覚えています。

いま見ると、形と機能が思わぬ形で融合した大変美しいデザインで、やはり驚きます。現在、私は立体的な形がどう機能するかを解明したり設計したりするのが研究テーマで、折り紙のアイデアから、宇宙や建築で使える展開構造を目指しています。こうして見ると、遊ぶ側から創る側になった違いはありますが、当時からテーマは変わっていないようです。

ていると、思うように飛んでくれない……49年前からこれまで、たくさんのKoKa読者が「なぜ飛ばないのか」、「どうしたら飛ぶのか」悩んできました。だからこそ、うまくいったときの感動も大きいのです。そこから飛行のメカニズムや機体の構造に興味を持ち、研究することのおもしろさに気づいた子供たちが、一流の研究者やエンジニアに育っていきました。

大好きなことを続ける

もうひとつ、紙飛行機がKoKa読者を魅了し続

けてきた理由があります。それは、二宮先生が誰よりも紙飛行機を大好きなことです。

さらに飛ぶように改良されたもの、実在する飛行機を模したものの、美しいデザイン、奇抜な形状……毎月子供たちをワクワクさせ、驚かす紙飛行機を設計し続けたのは、子供のころから抱く大空への夢を忘れず、先生自身が一番夢中になっていたからです。KoKa読者はそんな二宮先生の思いに、自然と引き込まれていったのでしょう。

引き続き35ページからは、二宮先生の紙飛行機の歴史や、設計のひみつを紹介していきます。